

- ◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。
◎公共牧場の有効活用と自給飼料の安定確保を進めよう。

乳用牛

◇ 生乳の品質管理

J A全農あおもり牛乳冷却処理所が月2回検査している出荷乳の乳成分、乳質データをチェックし、乳脂肪率3.5%以上、無脂乳固形分率8.5%以上、体細胞数30万/ml未満、細菌数5万/ml未満の基準を満たすよう、以下の点に留意して良質な生乳生産を心がける。

- (1) 乳脂肪率は、夏季の暑熱ストレス等で粗飼料の採食量が減少すると、大きく低下するので注意する。乳脂肪率が低い場合には、良質な粗飼料を給与するとともに、涼しい夜間や早朝に給与量や回数を増やす。

また、飲水量の低下は採食量の減少に直結するので、給水機器の水量を確保するとともに、清潔な状態を保つ。

- (2) 無脂乳固形分率は、エネルギー量が不足すると低下するので、給与飼料の構成に注意する。特に、泌乳初期は泌乳量に見合うだけのエネルギー量を確保するのが難しいため、消化性が良い粗飼料を十分に採食していることを確認しながら濃厚飼料を増給していく。

- (3) 体細胞数が増加している場合は、早期に各個体の状況をチェックし、乳房炎感染牛があれば治療を行うとともに、ライナーゴムなど搾乳機器等にも異常がないか確認する。特に、暑熱ストレスで免疫力が低下する時期は、免疫力強化のためにビタミン類が不足しないように注意する。

なお、乳房炎軟膏による治療は、3日間だけでなく、完治するまで延長して行ったほうが、予後の経過が良い(最大で7日間程度)。休薬期間後は、残留検査に合格してから出荷する。

- (4) 細菌数の増加は、搾乳機器の洗浄・殺菌不良やバルククーラーの管理不良が原因であることが多いので、日頃の洗浄・殺菌作業を再点検するとともに、盛夏前にはバルククーラーの定期点検を必ず実施する。

肉用牛

◇ タイレリア病(ピロプラズマ病)の予防

- (1) タイレリア病(ピロプラズマ病)とは

ア 牛に寄生するダニが媒介する代表的な放牧病の一つで、牛の赤血球の中に寄生する小型ピロプラズマ原虫が原因となる。

イ 発病すると、牛は貧血状態になり、元気がなくなり、食欲不振が見られる。また、眼結膜や外陰部の粘膜が白っぽくなり、更に悪化すると黄色くなり、いわゆる黄疸が見られるようになる。最悪の場合、死亡することもある。

ウ 発病したことがある牛は、免疫により、感染しても発症しにくくなるが、初めて放牧する牛は免疫がないので注意する。特に、免疫のない牛が感染した場合、年齢に関係なく症状が重くなるため、流産したり、死亡することがある。

(2) 予防方法

ア 予防としては、この病気を媒介するダニを駆除するため、定期的に殺ダニ剤を使用する。牛の体表に塗るタイプ（プアオン法）のダニ駆除剤が市販されているので、初めて放牧する牛だけでなく、全ての放牧牛に実施する。

ダニが吸血するのは主にまぶた、耳、内股などの皮膚が比較的薄い部位なので、薬剤がこれらの部位まで広がるように、頭部及び尾根部には確実に塗る。



イ また、この病気は、放牧によるストレスで発症しやすくなるので、放牧前には、昼夜パドックに出して寒暖の差に慣らしたり、青草を給与する放牧馴致（予備放牧）が大切である。

ウ 放牧中は、特に初めて放牧する牛（県外導入の育成牛なども含む）に注意して看視を行い、家畜保健衛生所の定期検査を受ける。異常が見られた場合は、速やかに退牧させ治療する。

豚

◇ 肉豚の飼育管理

(1) 飼育管理

ア 軟脂豚やむれ肉は、気温の高い夏季に発生しやすいので、豚舎内の温度管理に注意する。

イ 軟脂豚は不飽和脂肪酸の多い飼料給与が原因で発生することが多いので、飼料給与体系に基づき日齢や体重に合った飼料を給与する。

ウ むれ肉などの異常肉はストレスによっても発生するため、適正な飼育密度を保つ

とともに、出荷時はできるだけいいに扱い、ストレスを軽減させる。

(2) 出荷時体重

ア 肉豚は、性別により脂肪の厚さや肉付きが異なるので、出荷時の体重を去勢豚では108～110kg（枝肉重量68～70kg）、雌豚では110～118kg（枝肉重量70～75kg）とし、上物率の向上に努める。

鶏

◇ あすなる卵鶏の飼育管理

- (1) 鶏舎様式：卵質を高めるため、開放式平飼い鶏舎を推奨する。
- (2) 飼育密度：成鶏で1㎡当たり5羽以下とする。
- (3) 飼料給与：発育段階に応じて、養分要求量を満たす配合飼料を次のとおり不断給与する。

給与期間	配合飼料の種類
餌付け～4週齢以内	幼すう育成用
4週齢～10週齢以内	中すう育成用
10週齢～産卵開始前	大すう育成用
産卵期	成鶏飼育用

(4) 衛生管理

- ア 家畜伝染病予防法が定める「飼養衛生管理基準」に従う。
- イ 鶏ふん処理は「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」が定める管理基準に従う。
- ウ 鶏に異常が見られた場合は、直ちに地域の家畜保健衛生所に相談する。

草地・飼料作物

1 牧草の作況情報（5月25日刈取り、定期刈り調査）

調査項目	(cm、kg/10a)				
	本年	前年	平年	前年比	平年比
草丈(cm)	90	84	79	107%	114%
乾物収量(kg/10a)	507	351	355	144%	143%
生育ステージ	出穂前期	出穂期	出穂期		

注1) オーチャードグラス（利用1～4年目の平均値）。

2 1番草の収穫及び追肥

- (1) 消雪が早く好天が続いたことから牧草の生育が早まっている。1番草の作況調査では、乾物収量は平年比143%で平年よりも多収となっている。6月4日現在、オーチャードグラス晩生品種は開花期に、チモシーの中生品種は出穂期に達しているため、刈り遅れにならないように収穫作業を進める。
- (2) 2番草の収量を確保するため、刈取り後は速やかに追肥する。追肥量は10a当たり窒素6kgを上限とする。施肥量が多すぎると、株枯れの発生や硝酸態窒素の蓄積につながるので注意する。

3 アワヨトウの早期発見と対策

- (1) アワヨトウの第1世代の幼虫は7月中旬まで発生するおそれがあるので、注意が必要である。アワヨトウは、新播草地や1番草の収穫後間もない再生初期の若い牧草に発生しやすく、また、圃場の中央部での発生が多いので、草地を入念に見回り、早期発見に努める。この際、幼虫が黒色の場合は、発生密度が高いので注意する。
- (2) アワヨトウが多発した場合は次のような対策をとる。
- ア 刈取りが可能な草地は直ちに収穫する。
 - イ 刈取期に達していない場合は、スミチオン乳剤1,000倍液を10a当たり100～300ℓ散布する。若齢のうちに散布すると効果的である。